

P2-039

子どもへの配慮がある小児医療環境に関する全国調査 ー小児病棟あるいは混合病棟を有する病院の比較ー

住吉 智子¹、中島 伸子²、外山 紀子³、
向井 隆久⁴、木内 妙子⁵、前田 樹海⁶、
亀崎 路子⁷、山下 雅子⁶

¹新潟大学 歯学部保健学系、

²新潟大学 人文系教育学部、

³早稲田大学 人間科学学術院、

⁴別府大学短期大学部、

⁵東京工科大学 医療保健学部、

⁶東京有明医療大学 看護学部看護学科、

⁷杏林大学 保健学部

【目的】

本研究は、子どもへのより良い環境づくりを目指した学際的検討を行うため、日本の病院における子どもに配慮された医療環境の実態と、説明と同意に関する取り組みについて明らかにすることを目的とした。

【方法】

自記式質問紙法による横断調査。平成27年8-9月、2015年度版全国病院リストのうち、小児専門病院、小児科を標榜する病院(定床300床以上)の計1,069件を調査対象とした。質問内容は病院の設置主体等の属性、小児入院の病棟の区分、子ども用に配慮された物的環境の有無、小児医療専門職の有無と職種。説明と同意に関するガイドライン(以下、ガイドライン)の有無、有の場合はその内容。子どもの権利に関する院内・院外研修について等である。全て記述式または選択式で回答を得た。

本研究は新潟大学人文社会・教育科学系心理研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【結果】

276件回収(回収率26.2%)、うち内容の欠損がない256件を解析対象とした。入院病棟は、小児病棟は115施設(44.9%)、混合病棟は141施設(55.1%)であった。小児病棟と混合病棟の χ^2 検定による比較では「外来：きょうだいの遊び場・待合室の設置」($p<.01$)、病棟の設備として「プレイルームの設置」($p<.01$)、「きょうだいの遊び場・待合室」($p<.01$)、「小児用トイレの設置」($p<.05$)、「小児用洗面台の設置」($p<.01$)は、小児病棟を有する病院に多い傾向であった。人的環境では、小児看護専門看護師の有無($p<.01$)、認定看護師の有無($p<.01$)、保育士の有無($p<.01$)のいずれも小児病棟を有する病院に多い傾向を認めた。また有意な差はないが「外来待合室」「外来診察室」「外来処置室」の子ども用壁面装飾は、どちらの施設も70%以上が「有」と回答した。保育士は全体の67.3%に配置されていた。ガイドライン有は、全体で36施設(14.3%)であった。

【考察】

入院病棟区分では、小児病棟を有する病院の方が、より子どもに配慮した環境が整えられていた。しかし、外来のプレイルーム設置、外来診察室の玩具、レントゲン室の玩具、外来の壁面装飾は差がなく、両者ともに外来診療室は子どもへの配慮を考えた設備が整えられていた。また保育士の配置では、混合病棟を有する病院でも、55件(50.0%)に保育士が配置されていたことから、2002年の保育士加算の影響を受け、近年、保育士配置の整備が進んでいることが示唆された。なお「ガイドライン」を有する施設は少なく、原因究明が課題となった。

P2-040

ホスピタルプレイスペシャリストの授業を受講した看護学生の小児看護学実習における活用状況

齋藤 雅世^{1,2}、平元 泉¹、大高 麻衣子¹、
小山 悦子²

¹秋田大学大学院医学系研究科 保健学専攻、

²NPO法人ホスピタル・プレイ協会

【目的】

看護系大学生を対象の小児看護学の講義の一環として、小児医療施設で活動経験を持つホスピタルプレイスペシャリスト(HPS)を講師として、HPSの活動について講義・演習を取り入れることを試みた。HPSによる講義・演習による学習効果を、小児看護学実習への活用状況について学生がどのように認識しているのか明らかにすることを目的に調査を行った。

【方法】

1. 調査期間：2015年7月～2016年7月。

2. 対象：看護学専攻学生54名。

3. HPSによる授業の概要：1) 講師：HPS1名。2) 授業時間・内容：3年次「小児看護方法論」の2コマ4時間で、講義・演習を設定した。内容は、(1)HPSの働き(講義)、(2)遊びの体験(演習)、(3)病児の気持ちの理解(点滴ルート確保時のHPSのディストラクションのロールプレイ)、(4)病児の支援(事例の遊びについてグループワーク)とした。

4. データ収集・分析方法：授業後のレポートから「4年次の小児看護学実習に向けて活用したいこと」、実習後のアンケートから「HPSの授業で学んだこと・感じたこと」「実習で活用できたこと」に関する記述内容について、類似性に基づいて分類した。

5. 倫理的配慮：成績評価終了後に依頼し、同意を得たものを対象とした。所属機関の倫理審査委員会の承認を受けた。

【結果】

1. HPS授業後に「小児看護学実習に向けて活用したいこと」は、＜遊びの関わり＞42%、＜処置時の対応の仕方＞31%、＜子どもの理解・関わり方＞22%、＜家族への配慮＞5%の4項目で、＜遊びの関わり＞が最も多かった。

2. 実習後に「HPSによる講義・演習を受講して学んだこと・感じたこと」は、＜検査・治療・処置時の対応＞46%、＜遊びの意義＞42%、＜子どもの理解・関わり方＞12%の3項目であった。

3. 実習後に「HPSによる講義・演習を受講して活用できたこと」と回答した学生は、約8割であった。＜検査・治療処置時の対応＞48%、＜遊びの支援＞33%、＜子どもの理解・接し方＞19%であった。

【考察】

HPSの授業を取り入れた結果、治療処置時の対応については実習前より実習後に活用できたと認識する学生の割合が多く有効であった。遊びの支援については、実習後に活用できたとした割合は3割と少なかった。受け持ち患児の状況から遊びの実施が困難と感じている学生には遊びの捉え方の助言や関わり方への支援が必要である。